

# 新潟植物雑記（1）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池上, 義信, IKEGAMI, Y. メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00065462">http://hdl.handle.net/2297/00065462</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



池上義信※

## 新潟植物雑記(1)

Y. IKEGAMI : Notes on the Flora of Niigata (1)

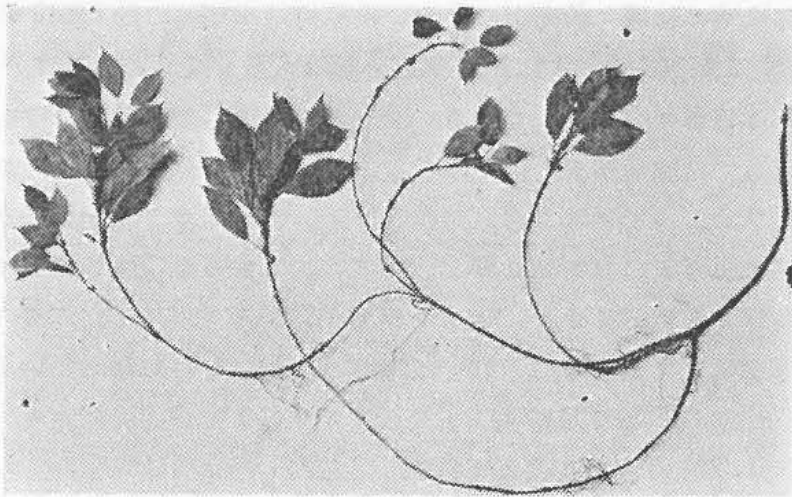
深雪地域の植物については、近來注目をうけて種々知見が発表されてきたが、寒暖両系の対峙、高山性植物の低下、遺存的植物の存在等のほか、特にいわゆる裏日本型の分化と  
いうようなことが興味を呼ぶところとなつている。本地域は前川博士の“日本海地域”に  
当り、数多くの裏日本型の植物を含むが、それらには性格や分布に多少のズレもあるので  
その中筆者は暖地性のツバキの対雪分化型とみれるユキツバキの分布境界を取上げてこれ  
をユキツバキ線と呼び、この特殊な生態区を限る一つの目標としている。然しこの地域に  
於て分化したと考えられる植物のすべてが対雪的のものでないことは勿論であり、こゝに  
は種々の要素に因るものが共存しておつて、その組成と由来は極めて複雑なものゝよう  
である。筆者は雪の越後に育ち、積雪の実態を身近にみている処から、本地域のフロラには  
深い関心をもち、関係各地を巡つて資料もいくらか集めたので、逐次知見をのべてその特  
異性を解明していきたいと思つている。然しこゝでは題名に従いその中新潟県の植物を主  
にとりあげて、順序も体系もなく気軽に断片的な記録をしながらこの問題にもふれていく  
ことにする。記述に先立ち、20年の久しきにわたり格別の御指導を賜つた故中井猛之  
進博士に深甚の感謝を捧げると共に、東京大学、京都大学、東京国立博物館をはじめ、各  
地の大学その他の諸先生並に学友諸氏の懇篤なる御指導と御厚誼に厚く御礼を申し上げた  
い。

(1) ヤマグルマ *Trochodendron aralioides* SIEB. et ZUCC.

本種は南支、台湾から九州、四国、本州にかけて分布する暖地性の常緑喬木であるが、  
ずい分の高所にも上り関東や越後に入つてなお1,600—1,800 mの尾根にも美事に群生し  
てよく実をつける。飯豊山の北麓米坂線附近に及んで野生は尽きるが、栽植ではなお秋田  
方面でもよい喬木になると聞いている。風の強い尾根のものや低地でも雪圧の強い所など  
では丈が低くて多条になるむきが多く、中には主幹を欠き何本かの直径4—5 mm位の細  
枝を2 mも地上又は地下にひいて所々に根を下し、何本かの枝を起たせていわゆる伏条型  
をなすものもある。(附図参照)ソヨゴなどと共に南方系常緑喬木の匍匐する形は興味深  
いが、ヤマグルマではさほど内的の力にはなつていないらしく、地中をほう枝も雪におさ  
れて地に伏した細枝に由来するものゝようであり、又同じ山に目通りの直径40 cm位の直  
幹があつたりして、この形は主幹が立上るまでの一つの対雪生態形と考えられるが、それ  
は又伏条型への分化の初期の姿ともみれよう。深雪地には丈の低い多条型や伏条型のもの  
が沢山に知られているが、その形質の発現や固定の度には強弱があつて、分化に段階のみ  
めることは種の形成に示唆するところが多い。

(2) サドテンナンショウ *Arisaema sadoense* NAKAI

※ 新潟市上所島，新潟南高等学校



ヤマグルマの伏芽  $\frac{1}{9.4}$  (新潟県北魚沼郡六十里越産)

サドテンナンショウはヒロハテンナンショウの変異の中に包含される。即ち7枚の小葉をもち、偽茎や葉柄が紫で苞も附属体も大きく、葯が黒紫色の点で区別されたが、發育のよいヒロハテンナンショウは往々2葉を出し、又小葉も6—7枚になつたりし、偽茎や花部などの帯紫の度にも移り変りがある。又サドテンナンショウの苞や花序の附属体の大きさもさほど異つたものでもない。佐渡の金北山にはヒロハテンナンショウが多く、新保川の沢(海拔400m)では小川に沿つた日かげに、小葉が40cmもあるちよつとミズバショウを思わせる程のもの、美事な群落があり、その又花茎の長さがまちまちで、頸まで偽茎にかくれた無柄状のものから、葉上高々にぬきんでるものまであつて異様にみえた。紅紫色を帯びる個体はよくあるが、長江川の沢(海拔400m)にはそのおびたゞしい群生があり、偽茎や苞及び花部の色合が濃淡様々で、極端なものでは偽茎や葉柄が殆どまつ黒であつた。仏焰苞の帯紫のものにはムラサキヒロハテンナンショウの名がつけられたが(初島1934, 中井1940), それらも恐らく苞の他にも多少紫色の発現はあるものとみれるので、広くこのようなものを包含することにすれば、サドテンナンショウはムラサキヒロハテンナンショウ型の7葉品をさすことになる。

### (3) バシクルモン *Apocynum venetum* L. var. *Basikurumon* HARA

北海道の日本海側や青森の夏泊半島西海岸に知られており、越後のものは隔離分布ということになる。白井光太郎博士の“樹木和名考”にも引用されているように越後のものは古くから注目され、西蒲原郡弥彦山麓の間瀬(まぜ), 同, 角田山麓の五ヶ浜及び北蒲原郡の藤塚浜の、海岸砂地に群生して桃色の美花を開く。殊に間瀬では、なぎさ近くに生茂つており、遠く熱帯から分布をつゞけ北限ながらも立派に実をつけるツボクサと共榮しているのは面白い。大陸の種から分化したものであろうが、越後の現在の海岸線が決まるまでには、地形や地盤の著しい変動が繰返されてきたので、現在のものが洪積世あたりからの直接的な遺存品かどうかは疑問であり、上記のツボクサなどと共に案外新しい分布のものかと思われるふしが多い。因に大陸のものゝ学名には中井博士は *A. lancifolium* RUSSANOV の起用もお考えのようであつた。

(4) **北蒲原郡松浦の社叢** 新発田の東南、松浦村荒川部落の社(海拔40 m)から、東3 km程奥の山神社(海拔140 m)に続く小高い丘は人里も近く、大方はアカマツ、スギの林や雑木のいわゆるボイ山になつている。植生の多くは落葉或は冬枯のものであるが、谷間や両社殿の附近では植物がよく茂り冬でも緑が濃い。常緑の構成はユキツバキ、ヒメアオキ、エゾエズリハ、ハイイヌツゲ、ツルシキミ、チヤボガヤなど裏日本型の灌木を主とするが、これにアカガシ、ウラジロガシ、ソヨゴ、ヒサカキ、ツルマサキ、テイカカズラ、フエイチゴ及びヒメカンアオイ、オオキジノオシダ、コバノイシカグマ、フモトシダ(北限に近い)等を加えて、この辺としては暖地色の濃いものになつている。殊に山神社では谷が狭まり、川岸の喬木の梢高々にイタビカズラもよじ登る。アカガシは多くは伐られたが、なお幹周1.5 mのものも交えて群生し、佐渡、弥彦及び大平洋岸の相馬方面のものと共に分布の北を区切る。しかし半野生や栽植では更に遠く岩船地方にのび、表側では岩手県南部に及ぶ。又水湿の地にはオニシオガマ、ゴマナなどと共にギボウシラノも生え丘にはなおいろいろと奥深いものもあるが、早春ユキツバキやオクチヨウジザクラの花の下に上記のシダやフエイチゴが豊富に茂り、それに寒地色の濃いミズバショウの花が点々と白く咲交るあたりは面白い対照といえよう。

(5) **ゴバンノアシの漂着** 果実が佐渡の小木に漂着(1952, Nov. 神蔵庄平, 採)したことは森邦彦氏<sup>1)</sup>によつて知られ、最近又、北見秀夫氏<sup>2)</sup>も報告された。越後では糸魚川(1952, Nov. 齊藤砂, 採)や新潟市寄居浜(1947, Feb. 高見四郎, 採)に漂着している。新潟でも、時折上るココヤシの方はいつも中実が腐つて空であるが、ゴバンノアシは生死不明ながら中実は殆どいたみもなかつた。なお前記の1952年には漂着のグンバイヒルガオが新潟市関屋浜(三谷恵子, 採)と粟生島<sup>3)</sup>にそれぞれ発芽している。これらの源については不明であり或は案外のものかも知れないが、一応暖流の経路を示し分布や生態を考察する一つの資料にはなろう。対馬海流が佐渡の前浜の植物分布に及ぶ力の大きいことはすでに小原外幹氏<sup>4)</sup>の指摘するところである。能登沖でわかれた支流が佐渡海峡(佐渡と越後の間)を北に抜けるのでこのような漂着も起り、この支流の影響は重要であるが、流勢は季節や年によつて変動があり、更にこれに伴う沿岸流や風による表面流及び南下してくる寒流からの受継ぎもあわせて漂着の実態は複雑らしい。昭和29年5月、南蒲原郡森町小学校の児童達が寺泊で放流した12本の標識瓶の中2本はまもなく新潟市海岸に着いたが、9ヶ月後にその1本が反対方向の石川県河北郡七塚浜に上り、七塚町の北井喜正氏に拾われたことなどは興味が深い。裏日本のように種子の散る晩秋から冬にかけて風雨や波浪の激しい地方の海岸では、種子などが風波に送られて或は直接、或はリレー式に遠近の地と相当活発な交流や補給がなされるらしく、時折存外のものも芽生えることや、砂丘のシロヨモギ、ヒメレンリソウの消長、帰化植物のひろまりなどにその感の深いものがある。

1) 朝日新聞：昭和27年12月7日；佐渡に南国植物漂着—— 2) 北見秀夫：1955, 佐渡への漂着植物；採集と飼育, 17 (10) : 315—— 3) 森 邦彦：1952, 飛島にグンバイヒルガオを得た； Journ. Jap. Bot. 27 (11) : 336—— 4) 小原外幹：1911, 佐渡に於ける植物分布；新潟県博物調査：35